

# 情報消費社会の構造と行方

—再魔術化された世界—

鈴木 貢

## 1. はじめに（問題の所在）

本研究は、北海道文教大学論集（鈴木貢 2009）における高度消費社会に関する議論を踏まえ、新たな知見を検討し、現代社会の構造を多面的に分析することを目的とする。

現代社会は科学的合理化の進展により組織の官僚制化が隅々まで浸透し、その結果として社会的閉塞感を生んだ。社会的閉塞感に対する反発から非合理的な面に対する関心が高まり、合理的な面と併存することとなった。そして、社会的関心を盛り上げるために、様々な局面でパフォーマンスやイベントなどの活動（＝祝祭）が日常化している（＝日常の祝祭化）。

本稿では、現代社会の構造を分析にするに当たって、①再魔術化（政治・経済）、②労働（雇用）の変貌、③解離的・多重人格傾向とアウトソーシング（外注）、④監視社会の四つの観点から考えていく。

マックス・ウェーバー（Max Weber）は、近代社会を合理化（脱魔術化）された社会と位置づけた。しかし、科学的合理化が進展し、組織の効率化により官僚制化を招来することとなった。科学的合理化と官僚制化が進展した社会では、社会のシステムが硬直化し、人々は社会的閉塞感を打破するために非合理的（再魔術化）想念に捉われるようになる。政治を例にとれば、カリスマ的で扇動的な指導者の出現を期待するような事態が現出する。ファナティックな言説の政治家が、人気を博することは日常の風景と化している。再魔術化について、鈴木謙介（2005）は、「非合理的なもの、神秘的なものと、私たちの生活の結びつきを強化するべきだ、あるいは今現在、そのような結びつきが強化されつつあると考える議論だ」と述べている。本稿ではその見解をベースに文言を整理して、再魔術化とは「非合理的なもの、神秘的なものと、私たちの生活との結びつきが強化されつつあると考える議論である」と定義する。

そして、現代社会を捉える視点としては、見田宗介（2014）が提示した「情報消費資本主義」をベースに、情報消費社会として論考を進める。情報消費社会とは、「情報」と「消費」が相互に関連しながら、社会を構成する主要な二つの原理として機能している社会として捉える。多面的な観点からの分析を通して、現代社会の構造を明らかにしていきたい。

## 2. 再魔術化

### 2.1 政治的観点からの分析

トーマス・ポグントケ（Thomas Poguntke）とポール・ウェブ（Paul Webb）は『民主政治はなぜ「大統領制化」するのか』（2014）の中で、ハーグローブ（Edwin C. Hargrove）の次のような見解を引用している。

政治学者は、現代工業社会における「権力の個人化」の必然性について書いている。そこでは次のように記されている。ヨーロッパで階級対立とイデオロギー対立に基づく古い政治が衰退し、

テレビが人々に政治情報を伝達する主要な手段となり、政党と議会が執政府に対して弱体化する中で、次第に権力は人気のあるリーダーを通じて人々の前に現れるようになり、そのようなリーダーは人々の政治的関心を引き寄せるための主要な手段となるであろう。

現代政治における階級対立とイデオロギー対立の終焉は、古い政治が衰退し、新たな政治の誕生を意味するのではない。それは、冷戦構造の対立を経て、政治的関心からの撤退を含意している。多様な利害関心を調整し合意形成に至る粘り強い政治的活動ではなく、強いリーダーシップで人気を博する指導者を待望するようになる。合理的な観点から政治的指導者を選択するのではなく、カリスマ的で扇動的な政治家が人気を博するようになる。

このような状況を呈するには、テレビなどのマスメディアが大きな役割を果たしていることは言うまでもない。情報化と消費化を中心とする社会にあっては、地道に議論を重ねるよりも、扇情的な強い口調で訴えるような政治家が指導者として高い評価を得るようになる。そのことは、政治的指導者を選出する際にも、非合理的（再魔術化）思考からの影響が大きいことを示している。

## 2.2 経済的観点からの分析

経済的観点からの再魔術化の問題について、「消費」をキーワードとして考えていく。

消費の殿堂が絶えず再魔術化されるかどうかは、それがますますスペクタクル的になるかどうかにかかっている。スペクタクル自体は目新しいことではなく、消費に限定されてもいない。スペクタクルは歴史を通して現れ、しばしば、あらゆる種類の目的の達成に利用されてきた。見本市、展示会などは商品を売るためにスペクタクルを利用した初期の実例である。実際、スペクタクルは新しい消費手段の最も重要で間近な先駆けのひとつ、つまりデパートにおける成功の基礎をなしている（ジョージ・リッツァ 2009）。

スペクタクルとは、「演劇と『見世物』の両方を、根源的な『見せる』パフォーマンスが二つに分化する前の状態を指す」（高山 2000）のである。また、消費の殿堂とは消費環境のことである。様々な局面の消費環境において、スペクタクル化というパフォーマンスやイベントで消費者を惹きつけ、販売・入場などの促進を図ることが広範に展開されている。このことは、経済のエンターテインメント（＝娯楽）化を示している。経済（消費）活動の展開に付随して、消費環境をエンターテインメント化して、集客を測っているのである。そして、消費者の動向については、マスメディア主導による流行の創出が大きな影響を与えている。消費活動は、機能よりも際限のない欲望を喚起させる非合理的（再魔術化）な衝動に、突き動かされているのである。

## 3. 労働の変貌

「情報消費社会」の底流には、労働の変質という問題が横たわっている。ここでは、労働（雇用）について、コンピューターとの関連で考えていく。

より長期的視点で考えれば、コンピューターに代替されない能力をいかに身につけるか真剣に議

論する必要がある。かつては、単純労働は機械に置き換わるが、知的労働は人間しかできないという発想があった。しかし、蓄積した大量のデータから学ぶ「機械学習」によるコンピュータの発展は、このような考え方を覆した、(中略) コンピューターで代替されない能力とは、無限の選択肢から組み合わせを選び出す、つまり突拍子もない発想で新しい組み合わせを生み出していく能力である。(中略) けれども、このような能力は既存の学習スタイルと著しく親和性が低い。多くの学習はマニュアル化されており、解法をパターン化することに注力される。試験問題は、客観的正確性を期すため「正解」が存在する。しかし正解が存在するという事は有限の選択肢の中から選ばれているということの意味する。「正解」のない問題に対して答える能力こそが、コンピュータに代替されない能力である (柳川 2013)。

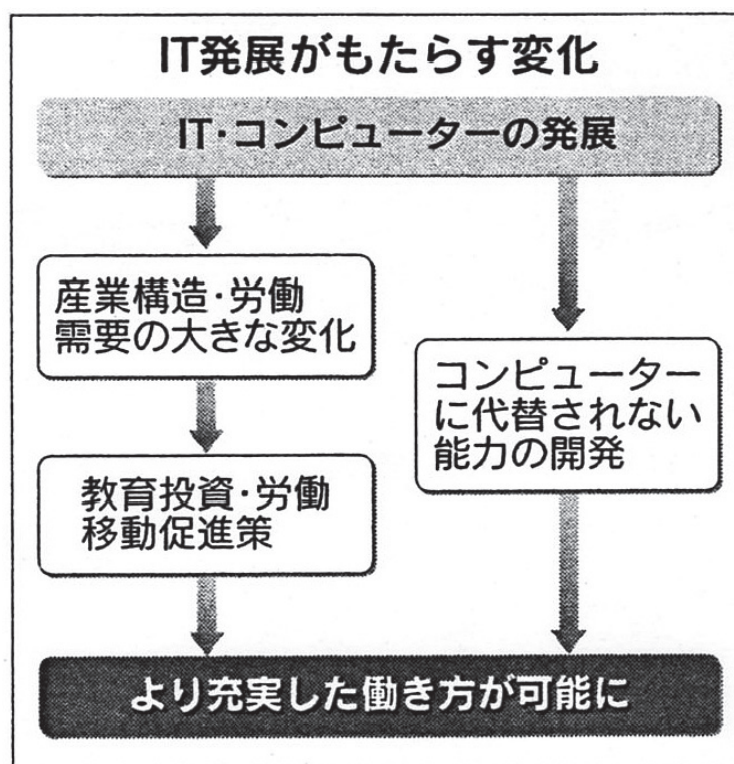


図1 IT 発展がもたらす変化 (柳川 2013)

情報技術の発展によって、労働形態は知的労働と単純労働に二極分化するといわれてきた。しかし、知的労働の分野にも、コンピュータによる「機械学習」の発展が波及している。そのことは、創造的人材の育成が喫緊の課題であることを示している。創造的人材といっても、天才を育てるわけではない。柔軟な思考と豊かな発想を有する人材が求められている。その人材育成には、初等教育からの早期の取り組みが重要である。なお、創造性の教育については、鈴木貢 (2008) を参照されたい。また一方で、高度な対人関係能力を必要とする労働は、コンピュータが苦手な分野として当面の雇用が期待できる。

現在の人工知能もロボット技術も進歩したとはいえ極めて未熟なため、人間が完全に労働から解放されることがないからだ。機械にできない仕事は両極端に分かれることが知られている。ひと

つは高度にクリエイティブな能力で、もうひとつは、教育を受けなくても誰もが自然にできるような仕事である（新井 2013）。

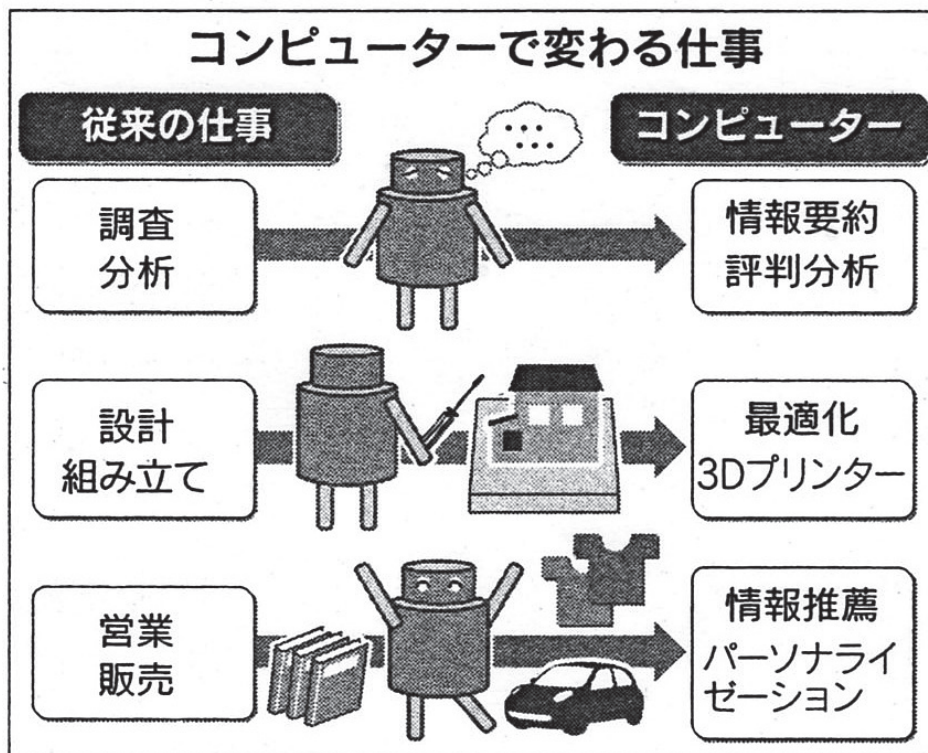


図2 コンピューターで変わる仕事（新井 2013）

前述の論文（鈴木 2009）で指摘したように、「単純労働の蔓延は、労働者としてのアイデンティティを喪失させた。日々の労働に生きがいを見出すことのできない労働者は、消費行動に生きがいを見出していった」のである。労働現場のコンピューター化は、合理化・効率化の進展が著しく、労働に対する生きがいの喪失が、人々を衝動的な消費行動に駆り立てていったのである。そして、その華やかな消費生活を演出したのはマスメディアであった。

#### 4. 解離的・多重人格傾向とアウトソーシング（外部委託）

情報技術の発展は、われわれの人格に変容をもたらしている。現代人の日常は、多面的な活動により構成されている。多忙な毎日の中で、家庭、職場、学校、スポーツ、娯楽、趣味、アルバイトなどにおいて、その場面ごとに適格的な人格（様々な顔）を持っている。その様々な顔を一つの人格にまとめて、自我同一性（アイデンティティ）を確立することが難しくなっている。

この社会でわれわれは、解離的・多重人格化の傾向をおびるようになります。人格の解離または多重人格とは、行動のまとまりが A（交代人格 A）、B（交代人格 B）、C（交代人格 C）、D（交代人格 D）・・・とある場合に、それらが中心的なまとまり X（基本人格）と、記憶によってつながっていないと考えられる状態が、ボケ老人でもない普通の人にもみられる場合のことです。（中略）いずれにしろ、日本では症例が少ないらしいですが、東（浩紀）が 90 年代のオタクのデー

タバース消費にそくして分析してみせてくれたような、解離的、多重人格的な行動傾向ならば、われわれはすでに、充分もっています。夫や妻の不倫はもはや軽いノリのフリンでしかありません。子どもの売春はエンコーと、これまた軽い響きで表現されるごくありふれた行為になっています。われわれは、家族という、人間社会が古くから維持してきた、最も濃密な「私的感情システム」(ホックシールド)においてさえ、お互いの行動と感情の一貫性、つまり自我同一的な人格のありように対して、ルーズになっているということです。(岩木 2004)

わたしたちは毎日の様々な場面で、異なる顔を見せて生活している。友人・知人の一人一人の異なる顔を知るのは困難である。情報化社会以前の個人の生活圏が狭かった時代と比較して、わたしたちの生活圏は飛躍的に拡大した。飛躍的に拡大した生活圏の中で、異なるライフスタイルをもって様々な役割を演じている。そして、その役割には固有の人格が付随している。一人の人間が演じる多様な役割(人格)を、ひとつにまとめることは困難が伴う。ましてや、家族といえども一人の人間の多様な役割(人格)を把握することは難しい。解離的・多重人格傾向は、飛躍的に拡大した生活圏の中で、それぞれの場面で適合的な役割(人格)を演じることによって生じるのである。

われわれが、じぶんの人格をじぶんで管理する能力をうしなう分だけ、探偵業、別れさせ屋その他の各種トラブルシューター、弁護士その他の法律家、精神科医、カウンセラーその他の心裡家など、あらたなサービス業や専門職が民間部門において発達します(岩木 2004)。

一例をあげれば、教育の分野でも家族の教育的機能の低下と反比例して、学校に対する苦情やトラブルが増加する傾向にある。情報消費社会では、教育は消費活動の一環である。保護者は子どもの教育について、コストパフォーマンス(費用対効果)に照らして、学校の評価を行っている。保護者にとっては、投下された資金に見合うコストの回収は、当然のことなのである。

教育や心の問題、法律的トラブルなどは、以前は家族やコミュニティが解決に当たった。しかし、家族やコミュニティは機能不全となり、問題が生じれば外部の専門家に任せて金銭的に処理するというアウトソーシング化が一般的となったのである。情報消費社会における民間サービス部門の発達は、日々生じる諸問題をアウトソーシング化することによる結果である

## 5. 監視社会

わたしたちの周囲には、たくさんの監視カメラは存在する。以前は、「監視」という言葉に拒絶感があり、その背後に国家権力が想定されていた。しかし、現在では「監視カメラ」はごく自然に受け入れられている。この変化は、どのように生じたのだろうか。

「監視」が問題になるとき、いつも引き合いに出されるのが、ジョージ・オーウェルの『1948年』という小説だ。この小説の中には、「テレスクリーン」と呼ばれる監視カメラを用いて、国民のあらゆる生活が管理される全体主義社会が登場する。私たちが「監視国家」を批判したり、あるいは批判する言説を見聞するとき、そこで前提にされているものは、オーウェルのような「非対称な権力を有した主体による、名もなき弱者の抑圧」といった筋書きだろう。

しかしながら、私たちが現在直面しつつある「監視社会化」とは、実際には、どこかに誰か悪者がいて、私たちが支配しようとしている、という事態とはほぼ無関連に生起している。繰り返すとおり、監視社会化とは、私たち自身が自己の選択としてそれを購入し、利用する限りにおいて、「社会の監視化」なのである。そこで監視「する」主体は誰か。他ならぬ私たち自身である。(鈴木謙介 2005)。

監視社会化は社会の流動性の高まりを受けて、セキュリティという観点から私たちが要請したものである。しかし、国家権力による抑圧という見方は当たらなくても、監視社会化は国家権力にとっても利する点が多いことは事実である。私たちのセキュリティに対する不安感が、監視社会化の促進を助長したことは間違いない。そこには、「監視」という問題をめぐり、国家権力対反権力という図式が無効になったという事実を読み取ることができる。私たち自身も監視対象になるという事実を、積極的に受け入れたことに時代の変化を感じることができる。私たちの考え方の変化に、日々事件報道を洪水のように流しているマスメディアがセキュリティに対する漠然とした不安感の醸成に影響を与えているのである。

## 6. 情報消費社会の構造

現代社会は科学的合理化の進展により組織の官僚制化が全面的に展開した。その結果が社会的閉塞感を生み、合理的・効率的な面と非合理的な面が併存することとなった。現代社会の分析を通して、四つの観点の全体を貫くキーワードは、「情報」と「消費」であった。四つの観点を整理し、情報消費社会の構造を考える。

### 6.1 再魔術化

- 1) 政治的観点：①階級対立とイデオロギー対立の古い政治の衰退  
②テレビが政治情報伝達の主要手段  
③政党と議会の弱体化→カリスマ的政治的指導者を待望

政治的指導者の選出に当たっては、テレビが政治情報伝達の主要手段となったことにより、国民は合理的判断より人気先行のカリスマ的指導者を待望する傾向にある。マスメディアの誘導という危険性が常に存在する。

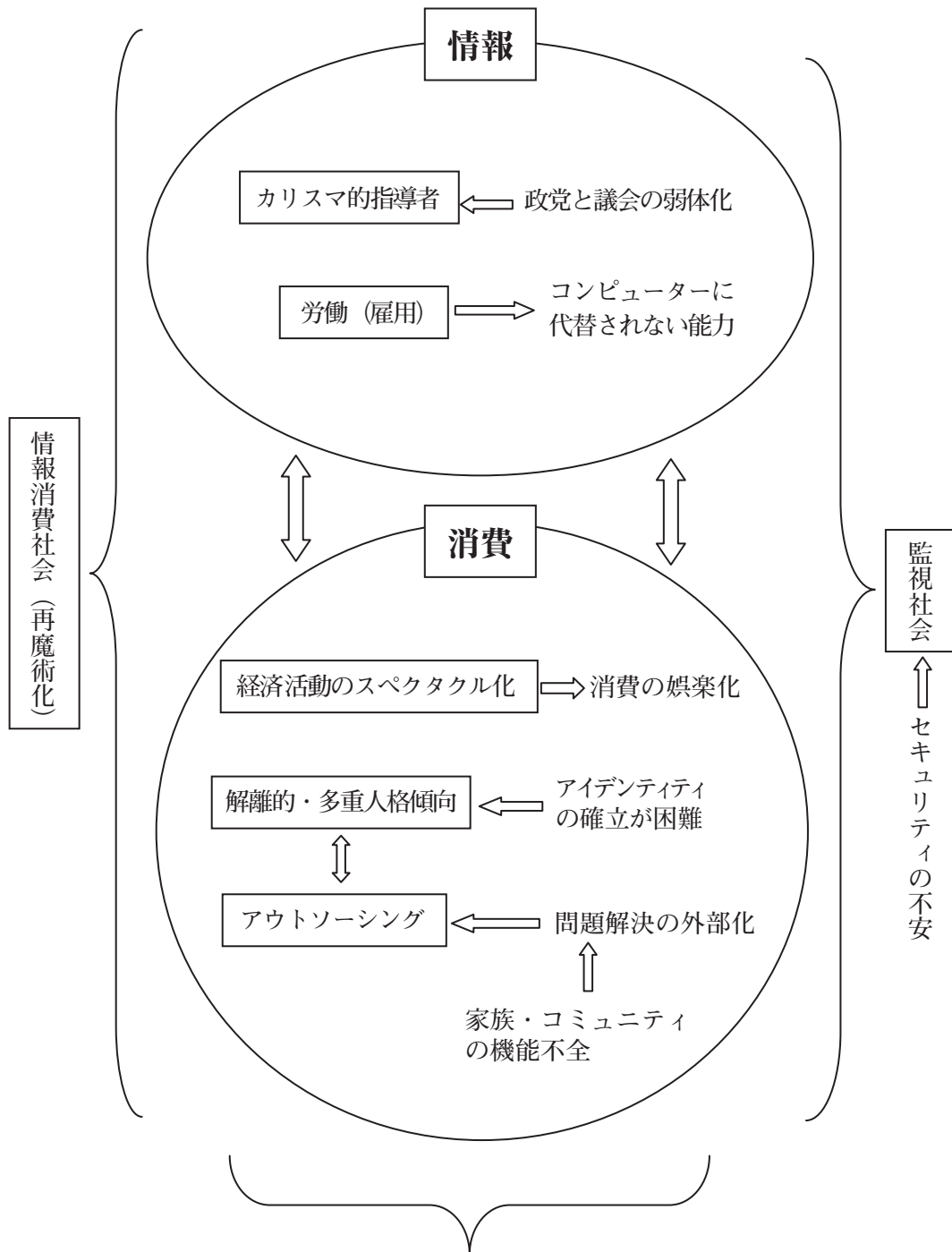
- 2) 経済的観点：①消費環境のスペクタクル化（パフォーマンスやイベントで魅力を吸引）  
②経済活動（消費）のエンターテイメント化（＝娯楽化）

消費活動のスペクタクル化により、再魔術化が進行している。ここでも、消費活動の合理的判断は後退し、マスメディア主導による流行の創出が消費者の趣味嗜好に大きな影響を与えている。

### 6.2 労働（雇用）の変貌

- ①労働（雇用）の観点からは、コンピューターに代替されない能力を身につけることが重要
- ②「正解」のない問題に答える能力こそが、コンピューターに代替されない能力
- ③創造的人材の育成が喫緊の課題（初等教育からの取り組みが重要）

情報技術の急速な発展は、労働（雇用）環境に大きな影響を与えている。コンピューターの進歩を押し留めることができない以上、コンピューターに代替されない能力を身につけることが重要となる。創造的人材の育成は、日本の現在の教育制度と親和性が低いので、入試・受験体制を含めて抜本的な改革が必要である。



マスメディアの影響

図3 情報消費社会

### 6.3 解離的・多重人格傾向とアウトソーシング（外部委託）

- ①アイデンティティ（自我同一性）の確立が困難→解離的・多重人格傾向を帯びようになる
- ②家族やコミュニティの機能不全→問題を外部に委ねる（アウトソーシング化）

現代人の日常は、多面的活動により成り立っている。場面ごとの様々な顔を一つの人格にまとめて、アイデンティティ（自我同一性）を確立することが難しくなっている。生活圏が飛躍的に拡大する中で、わたしたちは様々な場面で適切的な役割（人格）を担っている、それを一つにまとめることは困難である。そのことが、解離的・多重人格傾向の促進を助長することとなった。

自分の人格を管理する能力の喪失、家族やコミュニティの機能不全などは、問題の解決を外部の専門家に委ねるアウトソーシング化の発達を促すこととなった。

### 6.4 監視社会

- ①監視国家から監視社会への変化
- ②監視社会は社会の流動性の高まりを受けて、セキュリティの観点から私たちが要請した

かつての監視国家の論議は、国家権力による抑圧という全体主義社会が想定されていた。しかし、現在では社会の流動性の高まりを受けて、セキュリティに対する漠然とした不安感から監視社会化が受け入れられている。私たち自身も監視対象になるという事実で時代の変化を感じるとともに、マスメディアのセキュリティに対する漠然とした不安感の醸成がその背後にある。

## 7. 情報消費社会の行方

フランスの哲学者・リオタール（Jean-François Lyotard）は、現代社会のシステムについて、次のように述べている（1995）。

現在の世界をおおうシステムは、より多く効率的に生産し、より多く消費するという原理に支配されています。しかも、このシステムはモノや情報だけでなく、個人の私生活や文化、さらに人間の感情といった分野まで支配するようになっている。その意味では資本主義のさらに先をいくものなのです。（中略）このシステムは個人の自由のようなものさえもコントロールできるように複雑で柔軟だからです。

「その意味では資本主義社会のさらに先をいくもの」とは、本稿に照らせば、情報消費社会ということになる。無論、リオタールが述べていることではない。現代社会の分析を通して、「情報」と「消費」がキーワードであることが分かった。そして、この分析の背後に見え隠れするのは、圧倒的な情報量を誇るマスメディアである。毎日、洪水のように流れるテレビ画面からの情報は、流行を演出し、政治的情報を操作し誘導することも可能な力を有している。

情報技術の発展は、日常生活の利便性を飛躍的に高めている。その利便性の高まりは、逆に家族やコミュニティの機能不全を招来した。そして、家族やコミュニティの機能不全を、アウトソーシング化によって民間サービス部門が代行している。コンピューターに雇用の場を奪われ、アイデンティティの確立すら危ぶまれ、セキュリティに対する不安感から監視カメラに取り囲まれている日々をどのような未来を想定できるだろうか。



リオタール（1995）は、前述の引用文の最後に次のように述べている。

政治的なレジスタンスも意味を失ったと確信しています。しかし、それでも、人間の権利を擁護し、人間の尊厳について考えるという大きな仕事は残っている。時代の不安を爆弾や暴力によって解決するのでは道を考える。（中略）いま自分たちがどこにいるか分からない時代だからこそ、人間の生や死の意味について考える哲学が必要なのです。

山崎正和（1985）は、産業社会について次のように述べている。

産業社会の皮肉は、それが必死に目的を追求しながら、最終の目的となるべき、永遠の観念を欠いたことであった。中世の工人は神の永遠を信じて悠然と働き、永遠に残る伽藍建築をめざして、数世紀をかけることができた。近代の産業人は、日々の進歩と革新しか信じられず、どんな達成もかりそめのものに見えて、刻々に、自分の立てた目的を否定して進まねばならなかった。（中略）皮肉にも産業化の深まりは、それ自身の本来の人生観を裏切って、逆に、世界と人生の無常を実証することになったのである。

現代社会のスローガンは、改革である。昨日の自己を否定して、日々改革に取り組みなければならない。改革に取り組みない者は、取り残されることになる。後退することは、許されない。しかし、改革そして前進が大義名分となった世界は、皮肉にも常に何かに追われる無常な世界でもあった。長い間、人間の理想であった「大きな物語」は20世紀に終焉した。近代社会は、誰もが自由平等である世界を目指したが、それは実現しなかった。しかし、それは実現しない不可能な夢となって、逆説的に文学・演劇・映画などの中で輝きを増している。逆の観点から考えれば、「大きな物語の終焉」は理想やイデオロギーの軛から解放されたとも考えることもできる。

山崎（1985）は前述の文末で、「世界全体は、所詮、捉え難い生成流転であるが、そうであればこそかえって丹念に当面の現在を生きよう」と述べている。その言葉は、「無言の哲学」と表現されている。「丹念に当面の現在を生きる」、その果に何があるのかは、未知の世界なのである。

## 文献

新井紀子,「コンピューターが仕事を奪う①」,日本経済新聞(2013.5.1)。

岩木秀夫,2004,『ゆとり教育から個性浪費社会へ』,筑摩書房,206-208。

ジョージ・リッツァ(George Ritzer), (2009),『消費社会の魔術的体系』(山本徹夫・坂田恵美訳),明石書店

見田宗介,2014,「高原の見晴らしを切開くこと」『現代思想12月号』,青土社,28-33。

鈴木謙介,2005,『カーニヴァル化する社会』,講談社,66-67・152。

鈴木貢,2008,「創造性の開発を目指す授業の試み」,

『北海道文教大学論集』,No.9,1-10。

鈴木貢,2009,「高度消費社会における劇場型空間の創出と都市環境の変貌」,

『北海道文教大学論集』, No.10,23-32.

リオタール (Jean-François Lyotard), 「堅固なシステム支配 文明は目標を持たず」

朝日新聞, (1995. 9. 12 夕刊)

高山宏, 2000, 『奇想天外・英文学講義』, 講談社, 23-24.

トーマス・ポグントケ (Thomas Poguntke), ポール・ウェブ (Paul Webb), 2014, 『民主政治はなぜ「大

統領制化」するのか』, ミネルヴァ書房, 29.

山崎正和, 『現代の「無常」を受容』, 朝日新聞 (1985. 6. 25 夕刊)

柳川範之, 「コンピューターが仕事を奪う①」, 日本経済新聞 (2013. 5. 1) .

**A Study of the Structure and Future of Information  
Consumption Society:  
Reenchantment World**

SUZUKI Mitsugu

**Abstract:** The purpose of this study is to analyze modern societies from four different viewpoints. The first point is Reenchantment of politics and economy. The second point is labor problems seen from the angle of employment. The third point is dissociating character tendency of problem solving utilizing outsourcing systems. And the last point is the problems brought on by surveillance societies. The first point: Two points must be considered. A charismatic leader is welcomed from the political standpoint. Spectacle phenomena of consumption activities also must be considered from an economic viewpoint. The second point: Abilities which cannot be substituted by computers are required. The third point: Dissociating character tendency is seen because it is difficult to establish one's own identity. Also, it is conspicuous that one tends to rely on outside means to solve various problems without solving them by themselves. The last point: A change from surveillance states to surveillance societies has been made due to security anxieties in our societies.